

思いやり通信

実家庭配付



仙台市立黒松小学校
令和3年8月27日
第8号

文部科学大臣からのメッセージ

先日、保護者の皆様と学校関係者に向けて文部科学大臣よりメッセージが発信されましたので、お知らせいたします。



保護者や学校関係者等のみなさまへ

コロナ禍において、児童生徒等の自殺者数が大きく増加しています。また、長期休業明けには、児童生徒等の自殺者数が増加する傾向にあり、不安や悩みを抱える子供たちが増えることも考えられます。

- ・ これまでに関心のあった事柄に対して興味を失う
- ・ 成績が急に落ちる
- ・ 不安やイライラが増し、落ち着きがなくなる
- ・ 投げやりな態度が目立つ
- ・ 健康管理や自己管理がおろそかになる

保護者や学校関係者、地域のみなさまにおかれましては、こうした子供の態度に現れる微妙なサインに注意を払っていただき、子供たちの不安や悩みの声に耳を傾けていただくようお願いいたします。

令和三年八月
文部科学大臣 萩生田 光一

夏休み中に「生き心地の良い町」という本に出会いました。この本には、全国で最も自殺率の低い町の特徴が紹介されています。この町に学び、私たちも学校を生き心地の良い場としていけるよう努めたいと思いました。

徳島県海部町（現海陽町）の自殺予防因子

- 1) 異質な要素を受け入れ、多様性を重視する (いろいろな人がいた方がよい)
- 2) 人物の評価は多角的に、長期的に行う (失敗は二度まで許せ)
- 3) 自己信頼感・自己有用感を醸成する (どうせ自分なんて、と考えない)
- 4) 緊密すぎない、ゆるやかなつながりを維持する (同調圧力を緩める)。
- 5) 問題は早期に開示させて、早期に介入する (適切な援助希求)

ポストコロナに提言

① 仙台市長選

SDGS 担い手育成を

「身近な自然を教材に体験プログラムを作り、仙台市内の保育園や小学校の総合学習で教えている。」

「ヘチマやアサガオを育てて夏の日差しを和らげる『緑のカートン』を作ったり、目を凝らして土の中の生き物を見てみたりしている。人間は自然の中で生かされていると、かみ砕いて教えている。授業後、『家で緑のカートンを作ってみた』『扇風機に冷たいタオルを掛けて涼んだ』と感想が届き、感心させられる」

「国連の持続可能な開発目標『SDGS』の担い手を育てる場は学校だ。子どもを見ていると、問題点を見つけ、それをど

6 環境都市



やぎぬま・まり 東京都出身。東京学芸大卒。都内で小学校教諭として勤務し、1987年仙台市に移住した。2004年、環境団体「シンプル&スローライフの会」を設立。独自の環境学習プログラムを構築し、市内の保育園や小学校で講師を務める。64歳。

「シンプル&スローライフの会」代表 柳沼真理氏

「解決するか、さまざまな教科で学んでいる。次世代への環境教育の必要性を感じる」

「新型コロナウイルス感染症が流行し、人々の環境意識は何か変わったか。」

「在宅時間が増え、電気や水の使い方など、さいいなことを見直す人が多くなったと思う。関わっている保育園は感染を防ぐため、砂場で遊んだ道具を毎回水洗いするようになったが、

水道を流し放しにするのではなく、バケツを五つ並べて順番に汚れを落とし、節水を心掛けている」

「感染リスクを避けるため屋外キャンプの気が高まったように、屋外で季節を感じながら遊ぶスタイルが今後のスタンダードになるかもしれない。人々が自然に触れる機会が増えたことは、コロナがもたらしたプラス面と言える」

「市内の環境団体の現状をどう見る。」

「多くの団体が活動しているが、以前のような勢いを感じない。毎年開かれる環境社会実験の企画コンペも、15年前は10団体ほどが応募し環境問題を連携

して解決しようという熱量があったが、最近は応募が2、3団体にとどまる。メンバーが高齢化する一方、後に続く環境NPOなどが育っていない印象がある」

「私が仙台に移住した34年前は『脱スパイクタイヤ運動』のさなか。みんなが加害者で、被害者でもあるため、協力してきれいな空気にするという大きなムーブメントだった。仙台にはそういう運動が起きるポテンシャル(潜在能力)がある。コロナが収束し、余裕が生まれれば環境問題にも改めて目が向き、行動する人が増えるのではないかと期待している」

(聞き手は報道部・島形桜)